石川県立美術館だより

BIJUTSUKAN DAYORI

第397号　平成28年11月1日発行

第63回 日本伝統工芸展 金沢展

NHK会長賞《沈黒象嵌合子「能登残照」》山岸一男（石川）

- 加賀藩の美術工芸Ⅱ
- 石川の文化財【古美術】
- 秋の優品選Ⅱ【工芸】
- 優品選 ―守・破・離―【近現代絵画・彫刻】
- 長谷川大治郎・梶本良衛 木彫二人展
- 企画展Topics「絵画にみる江戸のくらし」

1F企画展示室

第63回 日本伝統工芸展 金沢展

◆主催／石川県教育委員会、日本放送協会金沢放送局、朝日新聞社、北國新聞社、日本工芸会
◆後援／富山県教育委員会、福井県教育委員会

10月28日（金）～11月6日（日） 会期中無休 ※最終日（6日）は午後5時まで（入場は午後4時30分まで）

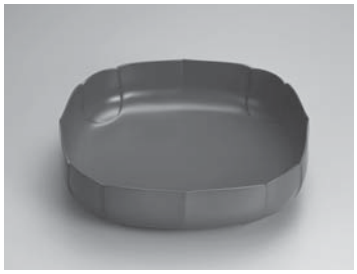
我が国は、四季の気候条件に恵まれ、多様な自然環境を形成しています。その中で、各地の風土に根ざした工芸品が生み出され、伝統技術を大切に継承し発展させてきました。本展は、この優れた伝統技術の保護と後継者の育成、ならびに伝統工芸に対する普及を目的として、毎年開催されるものです。

六十三回目となる本年は、陶芸・染織・漆芸・金工・木竹工・人形・諸工芸（七宝・硝子・截金など）の七部門の入選作品六二七点の中から、重要無形文化財保持者・受賞者等の作品と、北陸及びその他の地の入選作品を含め、三五四点を展示します。

今回の石川県の入選者は七〇人で、そのうち山岸一男氏（漆芸）がNHK会長賞、田島正仁氏（陶芸）が朝日新聞社賞、寺西松太氏（漆芸）が日本工芸会保持者賞、竹岡千穂氏（漆芸）が日本工芸会新人賞を、それぞれ受賞されました。

朝日新聞社賞《彩釉器》
田島正仁（石川）

日本工芸会保持者賞《蒔絵箱「夜景」》
寺西松太（石川）


日本工芸会新人賞《乾漆盛器「覇王樹」》
竹岡千穂（石川）

◆展示作品解説

日時	11時～	13時30分～
10月29日（土）	《染織》坂口幸市	《陶芸》武腰 潤
30日（日）	《金工》般若 保	講演会
31日（月）	《陶芸》中田一於	《漆芸》寺西松太
11月1日（火）	《木竹工》細川 毅	《人形》紺谷 力
2日（水）		
3日（木・祝）	《木竹工》川北良造	《染織》毎田健治
4日（金）	《金工》宮薗士朗	《陶芸》田島正仁
5日（土）	《金工》魚住為楽	《漆芸》小森邦衛
6日（日）	《漆芸》前 史雄	石川県立美術館長 嶋崎 丞

◆講演会

演題／「一〇〇年後に残る工藝のために」
講師／林田英樹氏
（公益社団法人日本工芸会理事長・元文化庁長官）
日時／10月30日（日）午後1時30分～
会場／美術館ホール《聴講無料》

林田英樹氏

◆観覧料

	個人	団体（二十名以上）
一般	六〇〇円	五〇〇円
大学生	四〇〇円	三〇〇円
高校生以下	無料	無料

※当館友の会会員は、受付での会員証提示により団体料金になります。

前田育徳会尊経閣文庫分館

加賀藩の美術工芸Ⅱ

10月14日(金)～11月15日(火) 会期中無休

今回は特集「加賀藩の美術工芸」で、これまでほぼ毎回展示されてきた《青貝敬字箪笥》について改めて紹介します。本作は、加賀藩五代藩主・前田綱紀が書物を収め、座右に置いて使用した箪笥です。扉正面に螺鈿で「敬」の一字を大きくあしらい、その下に『周易』の一節「敬以直内 義以方外 敬義立而徳不孤」が記されています。この一節は様々に注釈されていますが、「敬うことで内面を正直にし、正しい筋道によって外にあたると、その徳によって孤立することはない」と解釈することができます。さらに儒教の新しい学問体系である朱子学では、敬を無限の向上心をもって学ぶ原動力と位置付けています。ここに、書物を体系的に収集し、かつ丹念に読み込むという綱紀の学問観をうかがうことができます。

すなわち、学問による人間陶冶(とうや)により周囲からの尊敬や信頼を得ることで、孤立や対立がない平和な社会を構築することができるとの信念が、前田綱紀による文化政策の根幹でした。そしてこの思想に深く共感し、世界大戦に突入してゆく時代にあっても文化の力を信じたのが、前田家十六代・利為でした。今年度これまでに開催した「名物前田藤四郎と甲冑・陣羽織」、「前田利為の業績とコレクション」そして今回の「加賀藩の美術工芸」は、いずれも昨年の特別展「加賀前田家 百万石の名宝」を補完することを第一の趣旨としていましたが、展示された文化財には前田家歴代の文化に対する高邁(こうまい)な精神と、それを実現する強靱(きょうじん)な意志が投影されていたと思います。

《青貝敬字箪笥》

第2展示室【古美術】

石川の文化財

10月14日(金)～11月15日(火) 会期中無休

石川県には、歴史的あるいは芸術的に優れた貴重な文化財が数多く伝えられています。これは、江戸時代に加賀藩主となった前田家の文化的施策が大きな要因の一つであり、その歴史的背景を基盤とするところの石川の文化風土は、芸術・文化全般に対する関心の高さというかたちで今日に引き継がれています。

能登地区は日本海の海上交通により、大陸との接触が早くから行われたため、歴史的な風土や文化を色濃く物語るものを中心とした文化財が残されています。一方、加賀地区では、古代・中世において白山信仰の中心であったことや、中央の社寺の荘園として開かれたことにより、それを反映する文化財が残っています。また、前田家が加賀藩主となって文化の展開をみせて以降は、前田家を中心に収集・育成された文化財が伝えられています。

当館ではそれらの文化財、中でも美術工芸品を中心に収集活動を行い、また保存と活用を目的として県内の社寺や個人の方々から多くの寄託を受けています。本展は、こうした石川県の貴重な文化遺産の一端を知っていただくとともに、文化財保護法に定める国宝・重要文化財の公開を目的として開催するものです。

石川県には現在二件の国宝が所在しています。当館が所蔵する《色絵雉香炉》と白山比咩神社所蔵の《剣 銘吉光》です。その二件の国宝を同時に見ることのできる機会です。ぜひお見逃し無く。

県文《盛上菊図》真宗大谷派金沢別院蔵

第3・6展示室【近現代絵画・彫刻】

優品選 ―守・破・離―

10月14日(金)～11月15日(火)
会期中無休

前号では鴨居玲の作品に関して守破離を語りましたので、今回は当館の油彩コレクションの根幹をなす高光一也作品について述べます。

高光が本県帝展入選者第一号となったのは、昭和七年第十三回展においてでした。その三年前に高光は父の友人暁烏敏の紹介で、中村研一に師事しました。昭和十一年文展監査展で特選候補となった《秋Ⅰ》は、師中村の雄勁な筆致と色彩をよく取り入れた大作です。師の作品が都会の男女の群像であるのに対し、弟子は農村の男女の憩いを描きました。以後戦後二十五年頃までを「守」としていいでしょう。

次いで、「破」は二十七年の《裸婦》に始まり、二十九年の初渡欧時以降三十八年《雪人夫》までの、大胆な筆致で量感たっぷりの裸婦と白黒に近いモノトーンの裸婦、さらに当時流行の抽象作品に呼応して幾何学的に人体が表現されていった時代です。

高光はほぼ十年を単位に作風を変化させていきました。その集成ともいえる昭和五十年以降の作品が「離」にあたります。《アラブの旅》、《カサブランカ》などから始まる、現代の日本女性を異国の風俗や風景・遺跡を背景にたたずませ、明るく健康的に女性美を歌いあげた作品群です。

高光の変化に富む六十年に及ぶ画業と、鴨居の四十年程の一時期以外ほぼ同一線上の画業、それぞれの作家に守破離があります。習作期、確立期、円熟期、変化であり深化をとげてゆく作品群をお楽しみください。

高光一也《裸婦》
1956年

高光一也《秋Ⅰ》1936年
石川県立工業高等学校蔵

第4展示室

長谷川大治郎・梶本良衛
木彫二人展

10月14日(金)～11月15日(火)
会期中無休

良質の森林資源に恵まれた我が国では、豊かな木の文化が窺えます。そんななか、我が国の仏像には伝統的に「一木造(いちぼくづくり)」と「寄木造(よせぎづくり)」の制作法があります。一木造は基本、一本の丸太から彫り進めて、本体を中心に作品を仕上げるものですが、原木の個性が表れる一方、どうしても作品の大きさに制限が生じます。一方、寄木造の方は主要部材として細めの材木等も継ぎ交えて彫り進めるもので、作品の大型化と分業・大量生産が容易で、平安時代以降の主要となった制作法です。本展の両作家においても、一木・寄木的両技法、プラスαの技法が窺えます。

長谷川氏の大型作品では、トーテムポール的な積み上げスタイルの作品のほか、具・抽象を混ぜたパーツ構成による空間構成的な作品パターンが見えますが、前者は一木造的、後者はいうなれば寄木的な制作法といえましょう。

梶本氏の作品は基本、大きな杉材を中心とする一木造的な要素の作品が多く見えるものの、部分を巧に繋ぐとともに手から先は鉄で作るほか、長谷川氏と同様、枘やダボでパーツを繋いでフォルムを構成する作品も窺えます。

どちらも継ぎ合わせによる発展が可能で、しなやかで、細くても粘り強さを発揮する木の特性を生かしたもので、さらに漆の塗布や着色を施すなどして多様で独自の展開を示しています。

長谷川大治郎《立形・実在》

梶本良衛《ワ・タ・シ》

第5展示室【工芸】

秋の優品選Ⅱ

10月14日(金)～11月15日(火)
会期中無休

今回の工芸コレクション展の陶芸作品の中には、セットで制作されたいわゆる組物が展示されています。小さい皿、向付などで、それぞれ同じ形体をしたものが五、六点で一組の作品となっています。

向付とは、本来日本料理で膳の向こう側に配する容器のことで、なますなどの酢の物や刺身などを盛りつけるとされています。また小皿は、醤油や酢を入れたり漬け物を盛ったり、たくさんの料理を取り分ける際などに用いられることが多いでしょう。いずれにせよ美術作品としては、過度な装飾をひかえ、料理を引き立たせるような意匠のものが多く見られるように思います。

本展に出品の、北大路魯山人作《染付銹絵紅葉文八角向付》(①)は、六客一組で八角形をした筒状の姿をしています。湯呑みのような形状で向付としてはやや深いようにも感じますが、側面に茶褐色の銹絵で表した紅葉と、染付の線条文を交互に配し、川の流れに紅葉が散っているような雰囲気を感じさせ、秋の季節感が漂っています。一方、富本憲吉作《竹林月夜図皿》(②)は五枚一組で、見込にそれぞれ染付で郷里・大和の情景が簡潔な筆致で描かれています。中央やや下方に倉を配し、その両側には生い茂る竹林を描き、上方の空には月が出て雲がたなびく穏やかな景観を抒情的に表現しています。このように、季節感や自然の情景をさりげなくあしらった器は、和食にぴったりの作品といえるでしょう。

①北大路魯山人
《染付銹絵紅葉文八角向付》

②富本憲吉
《竹林月夜図皿》

第7～9展示室

第69回

示現会展巡回金沢展

11月9日(水)～13日(日) 会期中無休

一般社団法人示現会は、本年四月、東京の国立新美術館で第六十九回展を開催しました。巡回金沢展では、昨年に続いて本部基本作品六十一点(受賞作品を含む)と地元石川県作品三十三(遺作一)点、合計九十五点を展示します。示現会は堅実中正、清新な具象絵画を目指して、昭和二十二年石川寅二を中心に創立以来、(故)大内田茂士、(故)楢原健三の両芸術院会員を輩出しています。

一般社団法人示現会石川県支部は、平成二十一年に設立され、多くの方々のご理解と支援のもとに、翌二十二年より巡回金沢展を開催しています。

◇入場料／一　般:五〇〇円(10名以上四〇〇円)
65歳以上:四〇〇円、大高生:三〇〇円
※障害者手帳をお持ちの方(と付添者)、中学生以下:無料
◇連絡先／南外志雄
電話:〇九〇―六八一〇―〇四三六

第7展示室

風の会

11月16日(水)～20日(日) 会期中無休

春の空にフワリと浮かぶ雲

タンポポの綿毛がフワフワと飛び、モンシロチョウがヒラヒラ舞う、河岸では飛び交うホタルの群れ頬をなでる、ここちよい風等に考えている時に、ふう(風)を思い付き、全員の気持ちが一致しました。

自由で新しい発想による絵画制作を目的としています。今回、石川や富山在住作家の会員相互の協力により、発表の機会を設けることが出来ました。

抽象、具象を問わず、それぞれの視点や表現方法が個性豊かに現れていることと思います。ぜひ、この機会にご覧いただき、ご指導いただければ幸いです。

◇入場無料
◇後援／北國新聞社、北國新聞文化センター、テレビ金沢
◇連絡先／江守マリ子　金沢市長町一丁目三―三六
電話:〇七六―二二二一―三五八八(自宅)、
〇七六―二四五―七四〇三(アトリエ)
辰村浩子　電話:〇九〇―三一九七―五三六一

第7・8展示室
第101回
公募写真展研展

11月30日(水)～12月5日(月) 会期中無休

東京写真研究会が主催する研展は、関東、中部、関西、北陸の四支部で構成され、公募展は四支部巡回で開催されています。会員部門と公募部門に分けられていて、今回は三四八点の作品が展示されます。

北陸支部においての入選者は、会員部門が五名、公募部門は四名となりました。会員部門の「研展大賞」を北陸部では十年ぶりに高田進さんが受賞しました。

合評会は十二月四日(日)午後二時より行います。

◇入場無料

◇連絡先／土田貴夫
金沢市東山二丁目二―八
電話：〇七六―二五一―〇七二三

第8・9展示室
第26回
石川独立DO展

11月23日(水・祝)～27日(日) 会期中無休

石川独立は、昭和五十四年に県内在住の独立展出品者を中心にDO展として発足しました。日本的フォービズム(野獣派)の流れを汲む独立展は、自由で個性強烈な作家を輩出している事で注目を集めています。

◆出品予定作家

大部雅子、京岡英樹、桑野幾子、田井淳、西又浩二、堀一浩、堀田正人、三浦賢治、乙部久子、桜井節子

◇入場無料

◇連絡先／堀一浩
電話：〇九〇―四三二六―五八四九

第7～9展示室
2016 一陽会 金沢展

11月30日(水)～12月5日(月) 会期中無休

今秋、東京六本木の国立新美術館で開催されました第六十二回一陽展(九月二十八日～十月十日)に出品した、一陽会石川支部メンバーの絵画二十九点、版画二点、彫刻二点の作品を展示します。

一陽会は「清新にして深奥なるものの創造に勉励し、新時代の美術を推薦せんとする。尖鋭なる未完成こそ推薦し、前人未踏の新分野の確立に努力するものである」。

この精神をふまえ、日々研鑽努力してきた渾身作を展示いたします。美術愛好家の方々にご高覧いただいて、ご教示いただければ幸いに存じます。

◇入場無料

◇連絡先／一陽会石川支部副支部長 竹田明男
電話：〇七六―二四八―五八九八

第9展示室
第1回 青柳会書展

11月25日(金)～27日(日) 会期中無休
(最終日のみ午後5時閉室)

青柳会(元金沢玄心会)は、書における古典研究と創作を目的に六年前に立ち上げ、微力ながら研鑽を積んでまいりました。本部、玄心会は神戸にあり、芸術院賞受賞者であります故劉蒼居先生が設立された組織で、以来二十八年となります。

青柳会として第一回目となる今回の会員展には、日頃勉強している古典を基本として漢字、調和体、古典の臨書等々を自由な感性で展示させていただきます。

『書は書いてなんぼや』とは、わが玄心会創立者である故劉蒼居先生の口癖でありましたが、今回の会員展の作品に、その日頃の研鑽の成果が表れていますかどうか、ご高覧いただければ誠に幸甚です。

◇入場無料

◇連絡先／青柳会会長 中川青玲　小松市島町ル十八
電話：〇七六一―四四―四二六五

企画展Topics

「絵画にみる江戸のくらし ―浮世絵版画を中心に―」

平成28年1月4日（水）～2月12日（日） 会期中無休

新春の企画展は「絵画にみる江戸のくらし―浮世絵版画を中心に―」と題して、当館の浮世絵コレクションをご覧いただきます。浮世絵といいますと、喜多川歌麿や葛飾北斎、歌川広重などの絵師を思い浮かべる向きもあるかと思います。しかし今回は「江戸のくらし」という観点から、当時の人たちの生活を、絵画のなかに見出して行きます。

江戸時代の生活は、いったいどのようなものだったのでしょうか。浮世絵は、かつて江戸に暮らした人たちの姿をいまに伝えてくれます。テレビや雑誌のなかった当時、浮世絵は最新流行を伝えるファッションブック、美男美女のグラビア、旅行ガイドなど、様々な役割を果たしていました。そこには、江戸のくらしがタイムカプセルのように詰まっています。

本展では、テーマに合わせて選んだ浮世絵、約二〇〇点に加えて、くらしを彩った工芸品や絵画作品などもご覧いただきます。

第1章 遊楽の情景

江戸の人たちの遊びは、四季折々のアウトドアから、各種の芸事や吉原遊里といったインドアまで多種多様。新収蔵の《金沢士庶遊楽図屏風》や、江戸時代に実際に使われていた工芸品もあわせて展示します。

第2章 旅と信仰

気軽な近郊へのお出かけに加え、誰もが一生に一度は、と夢見たお伊勢参りなど、江戸の人たちが愛した旅路を、歌川広重《江戸名所百景》や《東海道五十三次》といった誰もが知る名作とともにめぐります。

第3章 くらしのなかの喜び楽しみ

恋人からの手紙に一喜一憂したり、家事や子育てに追われたり、はたまた歌舞伎スターに夢中になったり。現代にも通じる、くらしのなかの一コマをのぞいてみます。

歌川国芳
《当世商人日斗計 日七ツ時》

ミュージアムレポート

学校出前講座が九月末に小松市立向本折小学校、加賀市立分校小学校、十月に入り志賀町立志賀小学校、中能登町立鹿島小学校で開催されています。遠足の季節でもあり学校団体や小グループでの児童・生徒の来館も多くなっています。今年は当館や歴史博物館など兼六園周辺の文化施設で、小中学生を対象としたスタンプラリーを行っています。各施設での鑑賞や体験活動を行うと御朱印帳なるスタンプ帳にハンコが押され、その数によって足軽から大将、大名将軍と出世していくものです。夏休みには大盛況でしたが、秋の企画展の団体鑑賞などでもハンコを押した御朱印帳を配布し、学校での来館をきっかけに個人でも美術館へ足を運んでくれることを願っています。

行事予定

■土曜講座	午後1時30分～ 美術館講義室 聴講無料		
11月5日(土)	石川の文化財3 能登地方	谷口 出	
11月12日(土)	松田権六の師・六角紫水	有賀 茜	
11月26日(土)	石川の文化財4 大乗寺	谷口 出	
■秋のミュージアムウィーク	午後1時～3時受付 申込不要・要観覧料		
11月3日(木・祝)	**展示室でスケッチGO！**（所要時間30～40分） 磁気式お絵かきボードを使って、展示室の作品をスケッチします。		
■映像ギャラリー	午後1時30分～ 美術館ホール 聴講無料		
11月13日(日)	「美術工芸品の取り扱い方8 刀剣」（19分） 「シリーズいしかわの文化財～建造物編～《記憶への回帰》」（25分）		

アラカルト ただいま展示中

à la carte No.16

松蒔絵飾箱 まつまきえかざりばこ
昭和41年（1966）幅16.0×奥行27.5×高11.5cm

松田権六 まつだ・ごんろく
明治29年～昭和61年（1896～1986）

印籠蓋の側面から甲部にかけて描かれた松は、ぐねぐねと曲がりくねり、どことなく神秘的な雰囲気をたたえています。側面からわずかに孤を描いて飛んできた小鳥は、枝のあいだをくぐり、つがいとなって樹上にくつろいでいる様子。まるで異時同図法（同じ対象をくり返し描いて、時間の経過を表現する方法）のように、見る者の視線を誘導してゆきます。さらに蓋をあけると、身の部分にはまったく異なる意匠が現れます。しぶきを上げる波頭や静かな波打ち際、そのふちにちらばったとりどりの貝が金蒔絵で表現されているのです。さらに松へ目を戻すと、たれ下がるサルオガセ（地衣類の一種）や、メキシコ鮑で表現された松の実の大きさが際立っています。松を理想化して表現したと考えられ、本作は吉祥図案のひとつとして理解されてよいでしょう。

本作には松田自身の添書があり、それによると「桐柾材で作り箱の内外全面を均等に焼鏝で炭化せしめ」、本堅地を施してから「摂氏八十度の熱處理を連続八時間」行ったといいます。それは「変形故障の憂なきよう」にするための工夫であり、美しさだけでなく、いつでもどこでも、漆には常に変わらぬ耐久性がなくてはならんと考えた、松田らしい一品なのです。

次回の展覧会

会期：
11月19日（土）～12月18日（日）

前田育徳会尊經閣文庫分館	第2展示室
幽玄の世界 能面・能装束	大乗寺の文化財

第3・6展示室	第4展示室	第5展示室	1F企画展示室
優品選 ―守・破・離―	開光市展 ―誕生（BIRTH）―	明治の工芸	第63回 日本伝統工芸展金沢展 10月28日（金）～ 11月6日（日）

ご利用案内

コレクション展観覧料
一　般　360円（290円）
大学生　290円（230円）
高校生以下　無料
※（　　）内は団体料金
毎月第1月曜日はコレクション展示室無料の日（11月は7日）

今月の開館時間
午前9：30～午後6：00

カフェ営業時間
午前10：00～午後7：00 年中無休

11月の休館日は
16日（水）～18日（金）

ガン保険
チューリッヒ生命「終身ガン治療保険プレミアム」
通院治療が増加している時代の、画期的なガン保険
今、ガン保険にご加入されている方も、ご加入されていない方も今すぐチェック！
通話料無料
0037-6001-60140
既にガン保険にご加入されている方に
追加のご加入で、ガンの通院治療の保障を充実
●主契約：放射線治療給付金、抗がん剤・ホルモン剤治療給付金（給付月額20万円）
●保険期間・保険料払込期間：終身
月払保険料 1,500円 35歳男性
月払保険料 1,500円 43歳女性
広告有効期限：2016年11月30日　募補16004-20160112
受付時間：10時～19時（日曜定休）
※一部の固定電話から繋がらない場合がございます。恐れ入りますが携帯電話等でおかけ直しください。
ガン保険にご加入されていない方に
自由設計プランで、ガンの通院治療と診断給付金と先進医療まで備える
●主契約：放射線治療給付金、抗がん剤・ホルモン剤治療給付金（給付月額20万円）
●特約：ガン先進医療給付金、ガン先進医療支援給付金（一括15万円）、ガン診断給付金（一括50万円）、悪性新生物保険料払込免除
●保険期間・保険料払込期間：終身
40歳男性
月払保険料 3,216円
広告
《募集代理店》
株式会社ニュートン・フィナンシャル・コンサルティング
〒160-0022　東京都新宿区新宿5-17-18
ZURICH チューリッヒ生命
※記載の保険料は2015年6月現在のものです。※この欄は商品の概要を説明しています。商品の詳細については、パンフレット、ご契約に関する注意事項（契約概要、注意喚起情報）等をご確認ください。

石川県立美術館だより
第397号〈毎月発行〉
2016年11月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町２番１号
Tel：076(231)7580
Fax：076(224)9550
URL http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/